

学位論文審査の結果要旨

博士論文提出者	D18302 櫻井 信人		
博士論文審査委員	主査 職・氏名	教授	石田 和子
	副査 職・氏名	教授	大久保明子
	副査 職・氏名	教授	伊豆上智子
	副査 職 氏名	教授	小泉美佐子
<p>I 博士論文本審査結果の要旨</p> <p>学籍番号 D18302 櫻井信人から提出された博士論文「自死遺族グループの変容過程を通して見出された自死遺族の心的外傷後成長」について、令和 5 年 1 月 17 日 16 時から 18 時に博士論文本審査を行った。</p> <p>(1) 博士論文の概要と評価</p> <p>本研究の目的は自死遺族グループの変容過程を通して自死遺族が獲得した心的外傷後成長 (PTG) を明らかにすることである。研究はミューチュアル・アクションリサーチを参考に研究を実施した。研究対象者は同意の得られた A 県の自死遺族グループの参加者 7 名およびスタッフ 1 名とした。はじめに研究対象者とパートナーシップを形成した上で、共同で創出した『願い』の実現に向けて対話を繰り返し、自死遺族グループを進め、その中で確認された自死遺族グループの変容を局面として捉え研究対象者とスタッフの相互作用を含めて検討し自死遺族グループの変容過程における研究対象者の肯定的な発言や行動に着目して PTG を見出した。研究期間を通して、自死遺族グループは計 15 回開催し、自死遺族グループの変容過程として、局面 1【研究への参加同意とパートナーシップ形成】、局面 2【自死遺族グループに対する『願い』の確認と共有】、局面 3【卒業生の体験を共有する機会の設定】、局面 4【研究対象者が協力し合い、自死遺族グループの開催に向けて主体性を育む】、局面 5【立ち止まり振り返るための停滞】、局面 6【研究対象者とスタッフが協力し合い、主体的に自死遺族グループを運営する】、局面 7【つどいの場への進化】、局面 8【自死以外の話題による喜びの分かち合いの展開】、局面 9 では【『願い』と運営の再確認】、そして局面 10 では、【『自死遺族グループを末永く維持していく』という『願い』の実現に向けた自死遺族としての役割の発揮】ができ、研究開始時には見られなかった自死遺族グループとしての大きな変容が確認された。自死遺族グループの変容を通して、研究対象者全員がグループの運営に能動的に関わる変容が見られ、自死遺族グループの中で役割を見つけ、能動的に自死遺族としての役割を遂行し、他の自死遺族を支える側に移行した点は研究開始時には見られない新たな可能性の獲得であり、自死遺族の PTG であった。これらの結果から、これまでの自死遺族グループは語りを通して気持ちを整理することが主な目的であったが、継続的な参加を通して、自死遺族同士の結びつきが強まり、自己に向けていた意識を他者やグループに拡大していったことが、自死遺族のさらなる成長を促したと考察している。</p> <p>(2) 審査経過</p> <p>審査は研究者のプレゼンテーションおよび口頭試問にて行われた。アクションリサーチとして取り組んだ研究の到達点を自死遺族グループの変容として捉えようとしたのか、自死遺族グループに参加した自死遺族個々の PTG として捉えようとした</p>			

のか不明瞭であること、研究方法の選択など、研究計画に遡っての不備な点が最終論文まで影響していることが指摘された。これらの指摘に対して、自死遺族グループの活動を通して研究対象者個々の PTG を明らかにするには限界があったこと、今後、研究手法を変えてデータ収集する必要があると述べられた。自死遺族の支援グループは 2006 年に自殺対策基本法が制定された以降、全国的に増え、100 以上あるとされている。しかし、支援のゴールが見えづらく、活動が長く続かないグループも多くみられるという。本研究は、自ら声をあげにくい遺族のために 10 年余り支援活動を続けてきた研究者の実践活動が基盤にあり、COVID-19 の感染拡大の影響下においても粘り強く研究対象者と対話を繰り返し研究に取り組んだ点は大いに評価できる。実践的研究を通じて自死遺族支援のあり方、とりわけ看護師が関わる支援のあり方について追及した研究は他に見られず、本研究結果は貴重な資料となるとともに、今後の研究の発展に期待がもたれる。

(3) 審査結果

博士後期課程論文審査基準により「研究題目」「論文の意義」「論文の内容」「倫理的配慮」について審査を行った。研究計画の段階での不備が指摘されたが、研究の限界を認め、今後の研究の方向性を見出していること、論文の完成に向けて精一杯の努力をしたことを評価し、博士論文としての条件を満たしていると判定した。

II 最終試験結果の要旨

以下の項目について試問した。十分な回答が得られない部分があったが、自死遺族支援の実践的研究に粘り強く取り組み、研究結果に真摯に向き合い、さらに研究を進展させる計画を有していることを確認した。

1. 現象から研究方法を選択した理由
2. 研究枠組みに関係する主要概念について
3. 本研究から得られた結果について

以上により、本論文は、本学学位規程に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、最終試験を行った結果、博士の学位を授与することが「適当」とであると認定した。